

海にて【ぐだマシュ】

ネアの箱

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

試投稿。pixivから引つ張ってきたものです。
なにか問題がありましたらお教えください。

目次

海にて【ぐだマシユ】

ぎざざーん、ぎざざーんと音を立てて波が揺れている。俺とマシユは砂浜の岩部に腰掛けて夜の海を見ていた。

「…綺麗ですね、先輩」

「うん」

水着にパーカーを羽織った清楚な姿で、マシユが空に手を伸ばす。その先には満天の星空。輝く星を掬うように手を伸ばしたマシユは、そのまま虚空を掴んだ。

「私、こんなに綺麗な星空は初めてです」

動いた目線の先には黒々とした海があつて、その上にも星は浮いていた。

まるで世界の全てが星になったようで、星に包まれているような、不思議な気分だった。

「今なら、星が掴めちゃいそうですね」

「海の中に手を入れたら、掴めそうだ」

試してみますか、とマシユが岩を降りた。続いて俺も降りる。砂の上へぺたんと座ったマシユは押し寄せる波に手を伸ばし、そつと水を掬った。

「ふふ、やっぱり掴めないです」

「けどほら、マシユ。見て」

手の中の水に、星が浮いている。まるで星を掴んでいるみたいに。

「星、掴めてる」

「掴めちゃいましたね」

顔を見合わせて笑う。俺も砂浜に座って海水を掬い上げると、手の中に小さな宇宙ができた。

「俺も掴んだよ」

「先輩の空の方が、大きいです」

俺の手を覗き込んだマシユがそつと笑う。そのまま向き合つて、静かに口付けた。

「先輩……」

「マシユ、好きだ」

「私もですよ、先輩」

星空を海へ還して、立ち上がった。互いに濡れた手を繋ぎあつて静かに浜辺を歩く。ざざーん、ざざーんと引いては寄せてを繰り返す波の音だけが、辺りを支配していた。

「……このまま、二人で星空に溶けちやいそうだ」

「死んだ人の魂は、星になるそうですね」

星を見上げながら呟く。俺みたいな平凡な男でも、死んだらマシユと釣り合うような立派な星になれるだろうか。

「先輩も、ドクターも、…私も、いつか星になって、そしてみんなで永遠に一緒にいられるんですね」

「だとしたら、みんないつまでも一緒にいられるんだ」

俺たちの不謹慎な呟きも、今なら誰にも咎められない。ただ、一緒にいられる奇跡だけを称えて笑いあつた。

「俺はきつと、ずっとマシユのことが好きだよ」

「絶対、って言ってくれないんですか」

「マシユのこと忘れちゃったら、好きでいられないかもしれないから」

それでも、何度でも恋に落ちると約束できる。何度出会っても、忘れても、俺はずっとマシユと恋に落ちるんだって。

「それならいいです」

「嘘はつけないでしょ」

「嘘をついたら、清姫さんに怒られちゃいますから」

「それもそうだ」

言うのと、マシユが小さく水面を蹴った。ぱしやりと音を立てて水が飛ぶ。真似して蹴ってみると、バランスが崩れて海の中に倒れた。

「うわっー！」

「せんば、わっー！」

手を繋いでいたせいでマシユも一緒に倒れ込む。二人して海水まみれになって、思わず笑ってしまった。

「もう、またお風呂に入らなきゃいけないです！」

「一緒に入ろうか、そしたら二人で暖まれる」

立ち上がって、また手を繋いだ。拠点の方まで歩いていく。そつと手を離してスカサハさんに事情を話すと、「若いとはいいいものだな」と言われた。

「な、」

「まあいい、風呂を入れておいてやろう。人払いもしておいてやる」

「あの、スカサハさん、私たちはそういうのでは……」

「照れずともよい。私は分かっているからな」

明日、誤解を解いておかなければいけないと心に刻みつつ、二人で盛大なため息をつくのであった。